75

古代における疾病観，医療観について

黒野　伸子[1)]，大友　達也[2)]
[1)] 岡崎女子短期大学，[2)] 安田女子大学

I. はじめに

筆者らは，王朝文学に現れる病の記述を通して，古代人の疾病観，医療観を明らかにしようとしている．3年間にわたり，古代文学作品にあらわれる病に関連する記述を精査し，病がどのような役割を担っていたのかを解明しようとした．その結果，病の扱いには当時の知識人の持つ疾病観，医療観が反映されていることが示唆された．本発表では，その一端を紹介し，今後の研究に繋げたい．

II. 研究方法

『落窪物語』『源氏物語』の各作品中にあらわれる病の記述を抜き出し，神尾（1995）の疾病規定を用いて，病の扱いを明らかにする．『万葉集』については，時代がさかのぼるため，本規定を用いず，表現とメトニミーから精査を行った．

III. 研究結果と考察

1,『落窪物語』における病の記述から

『落窪物語』における病の記述からは，他者からの要求を回避する口実，自己の希望を叶えるための理由づけ，体験の特殊さを強調する効果など，対象者の願いをかなえる「便利ツール」の扱いがなされていることが明らかとなった．本物語は，リアリスティックな描写が特徴で，登場人物が生き生きと描かれている．しかしながら，病の扱いのみに焦点を当ててみると，「口実，理由付け」に終始しており，積極的な人々の活動とは程遠い扱いであった．

2,『源氏物語』における病の記述から

本物語では，「便利ツール」の役割の他，さらに「対象者の美しさ，弱さ，優れた点等の個性を強調する」ために病を用いていることが新たに分かった．光源氏の美しさのみならず，多くの女性たちの弱さを描くのに病が多用されているのである．例えば，かしこき女が藤式部丞の訪問を拒否する理由として，作者は科学的治療（服薬）を使っている．「極熱の草薬を服して，いと臭き」ために会えないというのである．拒否された藤式部丞は，かしこき女には女性らしさがないと断定する．逆説的に病や科学的治療を用いてかしこき女の弱さ，美しさを否定する好例といえよう．

3,『万葉集』における病の記述から

山上憶良については，「沈痾自哀文」，大伴家持については，「たちまちに枉疾に沈み……（3962）」からの作品群を取り上げた．山上憶良と大伴家持の作品にみる病の表現は，平安時代に比べると，直接的であり，症状も具体的に述べられている．憶良には，呪術的な治療に否定的な考えもみられ，古代であっても医療と呪術の対立関係があったことが示唆された．一方，家持は，祈ることで小康を得ており，呪術と医療の共存がみられる．

憶良の作品に働くメトニミーは，「苦痛」と「救い」であり，家持の作品に働くメトニミーは「病人（患者）」「治療」といえる．呪術と医療の「対立」「共存」の違いはあるが，疾病観，医療観の重層性が認められた．

IV. おわりに

一連の研究から見えてきたものは，古代の疾病観，医療観の多様性，重層性であった．大星（1999）は，王朝文学の成立時期における医療観について，「加持祈祷が医療の主役であったとの感が否めない」としており，王朝文学には物の怪が登場し，主人公を苦しめる描写も多いことから，大星の見解には説得力がある．しかし，具体的な治療法も垣間見えることから，医療行為が行われていたことも確かである．積極的治療であったか否かは別として，いずれの年代にも，疾病観，医療観には，多くの要素が含まれていることが，先行研究からも研究結果からも明らかである．

今後も，多くの作品から病の記述に検討を加え，疾病観，医療観の重層性を解明したい．また，古代人の疾病観，医療観が現代における健康観にどのような影響を与えているか，より深く考察していきたい．